

是等の法令の實行を見たことは一たびもなかつた。

グンヤクココンツウカイ 軍役古今通解 六卷。享保二年有澤武貞著。内容は軍役本源・賀州軍役考・賀州軍役通計・賀州軍役賃制・人数道具小割・軍役大小當務等の諸項に別たれてゐる。

グンヤクナイコウ 軍役内考 一册。享保三年有澤武貞著。知行當り人馬數、徒以下人夫之圖り、無息人親兄同陣に可出圖り等、戰時の準備に對する私案である。

グンヨウセンコウスカイ 軍容撰功圖解 一册。有澤武貞の著。戰闘上の儀禮・戦具の配列等を圖解したもので、寶永四年の著である。

グンリユウカン 群龍館 ↓ソウユウカン 壯翁館。

ケ

ケアヒ 毛合 江沼郡湯河に屬する部落。毛合の中に河尻があつたが、大聖寺藩ではそれを一村として取扱うた。次いで明治年中に至つて、更に毛合・河尻を併せて合河とした。

ケイガンエイシヨウ 桂嶽英昌 曹洞宗の僧。近江の人、幼にして佛陀寺の大源宗真に投じ、大源の寂後徹山官席に教を受け、次いで承天寺・吉祥寺に住し、晩年徹山の後を受けて大乗寺六代の主となり、又能登の永光寺

四十二代に移つた。應永十九年七月十日九十二歳で示寂。

ケイガンジ 桂若寺 金澤野田寺町に在り、天祥山と號し、曹洞宗に屬する。俗に五百羅漢と呼ぶ。その由來書に、『當寺開基寛永十九年傍泰嶺創立仕。元寺地は傳馬町地子地に有之礎、享保十四年類焼致し、同十五年石川郡泉野郡地の内へ移轉仕。』とあり、泉野郡地は即ち今の所である。寺藏五百羅漢は天麟の發願で、文化六年三月より檀那に勸進し、二百餘鉢を造つたが、文化十一年九月寶圓寺九峰の内食女犯の罪科顯れ、天麟も亦連座し、翌十二年十月六日他の六僧と共に泉野町端刑法場に於いて磔刑に處せられた。依つて後住欄牛が遺志を繼ぎ、文政八年三月に至り五百鉢漸く全備し、十八日から廿八日まで入限供養を行つたものである。

ケイギセンセイイコウ 公泉先生遺稿 三卷。大地昌言の五言古詩三首、七言古詩四首、五言律詩百九十一首、五言排律四首、七言律詩九十首、五言絶句二十首、七言絶句百二十一首、賦二篇、序六篇、記六篇、論一篇、讚五篇、説一篇、傳一篇、銘二篇、跋五篇、祭文二篇、墓誌一編、書牘五篇を集めたもの。門人加藤惟貞・印牧直道の編輯に成り、寶曆六年仲冬惟貞の序が附せられてゐる。

ケイコウイン 桂香院 加賀藩主第四代前田光高の子萬菊丸の法號。詳しくは桂香院轉英宗機童子。

ケイコキブン 稽古記聞 一册。富永全昌が、前田綱紀の言行に就いて、自ら見聞したことを記したもの。

ケイシユウイン 鑿袖院 加賀藩主第十三代前田齊泰の側室久世氏の法號。

ゲイシユウミチノキ 藝州道之記 一册。不破渡明著。廣島侯へ使節として、天明七年十二月廿日金澤を出發し、八年正月十二日着、十六日廣島發、二月四日歸着した紀行で、自作の詩歌など載せてある。

ケイジヨ 圭徐 ↓ダイトウケイジヨ 大透圭徐。

ケイジヨ 慶助 能美郡松岡寺兼立連慶の四男。公名刑部卿。享祿四年十一月十八日錯亂に依つて父と與に山ノ内に自害した。時に二十二歳。

ケイズチヨウ 系圖帳 諸士家々の元祖より當主までの系圖を記し、その履歴を載せた帳である。それを集め、苗字の伊呂波順にしたものは諸士系圖帳というて、藩侯と年寄中との席に備へ付けてあつた。延享四年七月に取立てたのがその濫觴であらう。

ケイセツシヨウキ 鑿靈小記 一册。村井長道著。聖學の大道たることを言とし、學問の階梯を和訳して、専ら童蒙初學の爲にしたもの。巻首に長街浩齋老人無名父編と載せ、文政庚寅仲秋浩齋と署した自序がある。天保二年五月上梓した。

ケイチヨウカナザハジヨウズ 慶長金澤城圖 もと藩老奥村氏藏、紙幅三六寸と二四寸許。金澤城の最古圖で、三・丸・新丸・北・丸・玉泉院丸に土第があり、後の金谷御殿の地には南町・堤町が描かれて居る。

ケイチヨウサダメガキ 慶長定書 五册。一名金城古定書。前田利長の慶長六年五月十七日の定書から、利常の寛永十六年八月二十日の定書までを、編年に集録したもの。原本

付紙に横長知私記とあつて、横山長知の集録したものである。

ケイチヨウウジ 傾聽寺 鹿島郡飯川に在つて、眞宗東派に屬する。

ケイチヨウチユウガイデン 慶長中外傳 堀麥水著。豊臣氏の事蹟を詳記して、元和元年大坂落城に及ぶ。文飾を加へて面白く記され、後の繪本太閤記も之によつて作られたのだといはれる。

ケイチヨウノエキ 慶長の役 (一) 前田利長の出征―慶長五年豊徳二氏の相争ふや、前田利長は東軍に歸し、その北進に先だち、使を小松城の丹羽長重に遣はして和を求めたが、遂に成立しなかつた。利長乃ち高島定吉・奥村永福・青山吉次を金澤に留守せしめ、弟利政と共に七月廿六日出發した。利長は石川郡福留に至つて軍議を定め、小松城を陥るゝに先だちて、その與黨大聖寺の山口宗永を屠るの要ありとし、廿七日能美郡三道山に次ずるや、岡島一吉・不破直光をこゝに留め、又前田良綱・寺西秀澄を千代に置いて小松城を牽制せしめた。八月朔利長三道山を發し、吉竹・本江・連代寺・三谷を経て木場灣の東を過ぎた時、丹羽氏の將坂井直勝は、富田重政の率ゐる輜重隊を襲撃したが、重政は横山長知・山崎長知等の援を得て之を撃退した。

(二) 大聖寺の戦―八月二日利長は江沼郡松山に在り、九里九郎兵衛を大聖寺に遣つて、城主山口宗永に降を諭したが、宗永は容れなかつた。因つて利長はこれを屠らんとし、三日松山を發したが、宗永の子修弘は南郷に出て防がうとしたので、利政・長連龍等それを追うて、直に城の大手鉾橋に迫り、山崎長徳等